

Special Essay

最近の医療被ばくに関する本について

医療センター放射線科 内田政史

福島原発事故による放射線漏れへの様々な報道がここ2年半あまり終息することなく次々となされ、人々の放射線被ばくへの関心も高まっています。被ばくには医療被ばくもあることから、医学部のみなさまも人ごとでないと考えられているのではないのでしょうか。そのような中で少し前に「放射線被ばく CT検査でがんになる」という本が出版され話題になっていました。読まれた方もいらっしゃるのではないかと思います。読まれた方、特に医療に関連される方々は、この本に書かれていることが本当に正しいのか、正しくないのかと思われませんでしたか。この医療被ばくに関連しては、そのさらに少し前に「低線量放射線は怖くない、被ばくは私の仕事です」という本も書かれていました。さらに「放射線ホルミシスが体にいい」という本も以前出版されています。ほぼ真逆の事をタイトルにされていますので、タイトルだけ見ると混乱されるのではないかと思います。なぜこのような事になるのかというと、低線量被ばく、これは医療被ばくにも相当しますが、発がんの危険性ということに対しての科学的根拠の乏しさに起因します。100mSv以下の線量における発がんの危険性をきちんと証明できる事実がないのです。あくまでも推論によって様々な報告、発がん予測の論文があり、そのことがさらに混乱を招いているのです。どの本も高名な学識者の方が執筆されており、解説には多くの説明が必要で、ここで直ちにどちらが正しいかなどを述べる事はできません。ただはっきりしている事実は自然放射線の存在であり、何もしなくても日本でも約2mSvの年間被ばくをみんなが受けていること、世界では5-20mSvという大変高い自然放射線を受けているところがたくさんあるということです。どのような対策を行っても被ばくゼロということはこの地球にいるかぎり無理だということです。この事実を踏まえて、みなさん一人一人が多くの本、論文を偏らずに読み、様々な意見、考えがあることを理解し、自分な

りの結論と出すことが重要だと私は思います。また医療被ばくに関しては、検査を受けることによる有益性も考える必要があります。図書館には様々な本が閲覧できますし、近年ではインターネットの普及により電子版の本、論文も簡単に手に入ります。今回は医療被ばくを例にとりましたが、みなさんにはぜひ多くの書籍、論文を読んで、幅広い考えを身につけていただきたいと思います。

